

## 第 1 回地域活動の場づくりに関するワーキンググループ 議事要旨

日時：令和 3 年 8 月 10 日

10時00分から12時00分

場所：神戸市役所 1 号館14階 大会議室

### 1. 地域活動の拠点について

#### (1) 課題

##### 【地域福祉センターについて】

- ・福祉のための場所というイメージがある。
- ・指定管理者制度が導入されているが、行政から指定管理者に人件費は出ておらず、ボランティア的なものであるため、地域福祉センターの利用が活発なところもあれば、そうではないところもあるのではないかと思う。
- ・収益事業ができない仕組みになっている。

##### 【その他】

- ・地域活動の場所を借りる家賃に苦勞をして、なかなか場所が見つからないという現状もある。

#### (2) 改善の方向性・アイデア

- ・地域活動の拠点の話は、地域運営組織や小規模多機能自治といった組織の考え方とセットで議論していく必要がある。
- ・活動と場所というのは両輪で動いていく。大事なのは雰囲気。おうちのような雰囲気がいい団体もあれば、会議室、店舗のようなところがいい団体もある。
- ・センターに縛られず、地域活動をするグループや、活動の内容、目的別に、ニーズに合った地域活動の場所を選択していくことが必要。
- ・集まるための場所は大切。そういう場があるから人が来て、人が来るから雑談が生まれて、雑談が生まれるからいろんなアイデアが発散する。
- ・既存の施設の中でもう少し広いところに集合する、いわゆる公共施設の複合化を検討してはどうか。
- ・地域福祉センターに多様な人を集めようと思った時に、愛称でもいいので、地域福祉センターとは別の名称で伝える必要がある。ぜひとも愛称募集をするところから。
- ・福祉というもののイメージが個人によって異なるので、意識や目的というものをきちっともう一回押さえ直して提示する必要がある。
- ・地域福祉センターはコミュニティのための拠点であるという意識の中で、目的は非営利であるが、収益事業は可能にするという議論をしていかないと駄目ではないか。

### (3) 具体的な事例等

- ・お寺や銀行の空き店舗、小学校や中学校の廃校を地域活動の拠点として活用。(丹波篠山市)
- ・社会福祉法人が、高齢者施設で地域の活動として居場所の実施や、場所提供をいただいている。
- ・現在は、地域福祉センターに集まって、毎月食事会を行っているが、かつては、お寺で高齢者向けのふれあい給食会が行われていた。

## 2. 参加を促す仕掛けづくりについて

### (1) 課題

- ・神戸は単身者や転勤族が多い。定住者だけでなく潜在的な人材はどこにいるのか。神戸の地域特性を考えて、こういう地域では多分こういう取組が必要というパターンを考えたい。
- ・新しく地域に来られた方にとって、地域のイベントへの参加はハードルが高い。
- ・地域活動に参加をしようと思ったときに、地域団体に加入しないと参加できないとなってしまうと、地域活動への参加のハードルが高くなってしまう。
- ・従来は、この日にここに集まります、という形の活動の在り方がもう主流だったが、もうそれが、若い世代の方は特に難しい。様々な担い手が、同じ場所で同じように集うというのはもう難しい。
- ・仕事以外の地域のつながりを欲しいと思っている人たちは結構いるが、地域活動に少しでも参加をすれば、ずるずると活動を続けていくことになるのではないかという底なし沼のようなイメージ、恐怖感がある。
- ・経済的に厳しい学生も多く、無報酬で地域活動に参加してもらうことは難しい。

### (2) 改善の方向性・アイデア

#### 【ITの活用】

- ・これからは、いろいろな担い手の方が、同じ場所で同じように集まることは難しい。その中で、働きながら、あるいはその場所にいなくても活動できる在り方を考えたときに、IT化というのは外せない方法。
- ・ICTも重要だが、壁新聞や手渡し通信といったローテクなものも必要だと思う。

#### 【より若い世代への働きかけ】

- ・若い世代(20代から50代)が地域活動に参加する目的は年代により違うので、ターゲットを一緒に考えるのはよくない。10代~20代は就職、30代から50代は

地域とのつながりが目的。

- ・来年度から高校で総合的な探求の時間というのが必須化される。小学校や中学校、高校での授業において、地域と若者が出会う場の創出をする。高校、中学校、小学校の若いうちにそういった出会いの場をつくっていかないといけない。
- ・大学生の力を借りるためには、活動への見返りについても考えていかなければならない。（少しの報酬、手作りのご飯、地域の人と交流できるような場など）

#### 【全般】

- ・地域コミュニティ施策の基本指針に示されているように、地域の包括的な団体、あるいは団体の合流が難しいのであれば各団体をつないでいく仕組みづくりが必要。
- ・団体をつないでいく仕組みとして、公務員の副業というのが1つのキーワード。市の職員が、住んでいる地域の仲介者としての役割を勤務時間の中で工夫しながらできるようなことも検討すべき。外部の人材を登用する場合は、漠然と地域に入れるのではなく、地域の様々な団体をつないでいくというミッションに特化させ、行く行くは1つの団体になるように仕向けていく。
- ・「ありがとう」と言ってもらえる関係をどうつくるか。地域活動の業務を細分化することで（若い世代が）担えることがあるのではないか。地域活動の仕事を細分化することで、得意な部分で地域活動に参加するということからスタートをすることが大事かもしれない。
- ・活動を自発的に自走させるためには、体力とお金が必要で、活動に企業を絡めると、予算面や、会計事務の話など、解決する部分があるのではないか。
- ・自分はこのタスクだったら役に立てるとか、このパーツをやりますということで、自分も参加している気分を味わえるというのは、参加者にとってもウィンとなる。
- ・地域の誰がどういうことに困っているのかというのが見えるプラットフォームも必要。今は地域活動をしようと思ったときに、組織に属しないと地域の情報に触れられない。気軽に助け合えるような、個人間のやり取りをもうちょっと増やせるような仕組みがあればよい。地域で動いてくれる若い方が増加するのではないか。
- ・テーマ型の活動もいいが、一方で地縁団体も大切。やはり普段からつながっておくということがないと、いざというとき何もできない。こども会から始めて、PTAをしてというような、地域団体のステップアップはすごく大事で、そういう人たちが途切れてしまうのは怖い。
- ・イベント中心だったものから事業中心に組み立て直していく。また。今まで運営という観点が多かったと思うが、これからは、経営という言葉に置き換えていかなきゃいけない。どうすれば地域がより続くのかという「運営から経営」。
- ・これまで地域は、年代ごとの縦割りの組織が前提であったが、これからは「ごちゃま

ぜ」の組織と拠点というものが必要になる。

- ・地域活動を「沼」から、「ぬか床」へと変えていかないといけない。地域に関わることが、その人にとってもメリット、友達ができて、生きがいもできて楽しくて、さらに小銭稼ぎもできるような、「ぬか床」にしていかなければならない。

### **(3) 具体的な事例等**

- ・しごとコンビニという事業により、小さな仕事を通じて、地域につながっていく。  
(岡山県奈義町)
- ・高校生に自治会長を任せて人材育成をしていく。(鹿児島県や沖縄県)